
桃花の源 泉下の守

三河可可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃花の源 泉下の守

【Nコード】

N5253S

【作者名】

三河可可

【あらすじ】

過去に仕えた王の墓に参る者と、その地に住む少女の物語。

己の未熟さが王を追いつめたと悔恨する男は、王と出会った桃花の花咲く季節に彼女の故郷へ赴く。

そこで偶然に出会った少女は時を経て成長し、親になり、年老いてやがて死を迎える。

同じく時を経て国は豊かになり、人々の生活も変わっていく。

国と共に時を歩んだ一人の女性の生涯が幕を下ろす時、そこに残されたものとは…

一（前書き）

テーマは「過去からの解放」です。

なんだかたつ苦しいですが、描写はキレイキレイでいきたいなと思っています。

原作キャラがほぼゼロなので、それでもちゃんと読める話にするのが目標。

唯一の原作キャラである“男”は一体だれなのか。すぐにわかると思いますが、名前は本文には一度も出さないつもりです。

最後まで読んでいただければうれしいです！

視界が遮られるほどの、花散の様だった。
風に舞う花吹雪は、次へ次へと薄衣に纏わりついて、淡い紅にその色を染めた。

眼前に広がる桃園の百を超える木々は、散れども散れどもなおも新しい花を生むかの如く、満開に咲き乱れる。
むせるように濃厚な桃の香が辺りを覆う。

一本の木の下で、男は立ち止った。

堂々たる枝ぶりは桃園の多くの木々の中でも際立って目につく。おそらく百年は下らないであろう樹齢を感じさせない開花も見事だった。

見上げると、陽を受けて白くまばゆい花天井が揺れた。

「やはり、居られましたね」

若い声が背後から聞こえた。

振り向くと、濃緑の豊かな髪を美しく結び上げた少女がゆっくりと拱手の礼をとった。

結い残しの髪の毛先が、鮮やかな山吹色の背子きものに一房落ちて、美しく映える。

滑らかな肌に、聡明そうな鳶色の瞳。意思の強そうな濃い眉。生気に満ちあふれた、姿形。

一瞬、時間が遡ったかのような錯覚を受けた。

「お待ちしておりました」

彼女が一步步を進めると、地に舞い落ちた花片が再び宙を舞う。
幻を見るような濃厚な空気と、現離れした景色の中、まるで花仙のような趣だった。

時を越えた少女の姿は、一つの予感を男に抱かせた。
その予感を確かめたくて、ゆっくりと口を開く。

「身罷られたか」

少女は一つ微かに頷き、頭を落とした。

「はい。祖母は…香桃は、先日亡くなりました。享年七十七でございます」

少しの沈黙があつて。

一度伏せた目が、再び男に向けられた。

「天寿でありましょう」

これから花開き、実をつける。肉体の最盛を迎える前特有の、力に満ちた前向きな視線。その活力は、肉親の死の哀しみを自らの中に取り込んでなお、それを乗り越えるだけの強さを持つ。

「そうか…」

男は静かに目の前の一等大きな桃の木に視線を向けた。

少女も同調するように視線を同じくする。

「桃園の木々が咲き乱れる様は、この国の繁栄を映しているのですよう」

その言に、男ははっとして少女をまじまじと見つめた。

少女ははにかんだ様に肩を竦めて、

「そのように祖母がいつも申しておりました故」

早口に言つて微笑んだ。

「申し遅れました。私が彩陽にございます。建国六十年の祝い歳に生まれ、今年十七になります」

彩陽と名乗った少女は、その面持ちを引き締めて語る。

「祖母はこの桃園のすべてを私に語り、この世を去りました。もちろん、貴方様のこともすべて伝え聞いております」

「そうか。そなたが、彩陽か」

男はその名を愛おしそうに発声して、穏やかに微笑んだ。

少女はその声を受け、薄紅に染まる地に膝をつくと叩頭した。

「ようこそいらっしやいました客人。本年は祖母に代わり私めが、御国繁栄のお慶びを申し上げます」

まるで男にそう告げることが自分の使命であるかのような、生真面

目な所作だった。

男はその少女の実直さに触れて、莞爾たる面持ちで対する礼をとった。それは見るものを惹きつけずにはいられない、自然で洗練された動作。

男の外見は若い。

しかしその一挙手を見た者には、永い生を過ごしていると確信できる円熟した立ち振る舞いであつた。そしてその面には、幾度の艱苦を乗り越えた者が得られる苦も楽も超越した表情が浮かんでいる。

「年を追うごとに、見事な花見を供じよう。と約束したのにな」

そう呟く瞳の色は、無常に対する哀しみもあり、また慈しみもあり。今は亡き香桃。この国の興国と共に歩んだその人生を忍び、また自らの過去と重ね合わせ。万感の思いを胸に、今一度花天井を見上げる。

「あれから七十余年の歳月が経ったのか」

季節は早春。

世を覆うは、花。

花咲かすは、世。

共に栄えるよう願ったは、いつのことか。

二

慶国赤楽七年。

舞台は興丘の街である。

この街は、雁との国境にほど近い高岫山の麓にある。堯天から雁国へと通じる交通網の大動脈である瑛北の街道沿いに位置し、雁との交易で栄える商業の街である。

時に新王が即位したばかり。前王まで数代に渡り短命の王が続き、国が大きく傾いていた赤楽の初期であつたが、商人たちは柔軟に時代の風を読み、命綱である雁とのパイプを断ち切らせることはなかった。強欲といえは聞こえは悪いが、この街に生きる者の富への執着の強さが功を奏したかこの街はそれほど荒廃をみていなかった。

何もない風景だつた。

急坂を休みなしに登つて来たために少し乱れた息を整えながら、男は振り返つて眼下に広がる果樹園を見渡した。

興丘の市街を抜けて急な隘路の斜面を登ると、段々に据えられた丘陵地に出る。街を見下ろす高台には、整然と桃の木が植えられていた。

季節は初春、本来ならば木々には所狭しと花咲き乱れる折である。

しかし男の眼前には、濃茶の幹が寒々しく風に揺れているばかりだつた。とうに花咲き実をつけることを諦めた持ち主に放棄されたか、その根元には淡緑の若芽が茫々と芽吹いていた。

心なしか、果樹園の奥に見える市街も薄灰色に燻つてみえる。垂れこめた曇り空が、さらに心を重くする。

胸の内にくすぶつたものを吐き出すように長大息をついた男は、ふと一点に目を留めた。

一本の若木に、薄紅色の花。行燈に火が灯るように一房ぽうと咲いている。

男は木に向かい、引き寄せられるように歩を進めた。

魅かれるように、花に手を伸ばす。

「触らないで」

背後から高い声が、制止を叫んだ。

男は今まさに桃花に触れようとしていた白い指を、はっと引つめた。

振り返ると、桃園に小さな来訪者の姿があった。年の頃は六つ七つばかりだろうか。肩で切りそろえた深い緑の髪が風に揺れている。勝ち気そうな鳶色の目は、見知らぬ来訪者に向けられて不審に満ちていた。

「せっかく咲いたのよ。百本もあるここの桃の木の中で、この木だけが蕾をつけたの」

自分より二十歳は年長者の男に、臆することなく物を言う。

「それを考えなしに触って、落とすというの？」

「…いえ」

男は小さな少女の剣幕に対し、対処に困ったようにぎこちなく首を振った。

「…そんなつもりはありませんでした」

呟きのように口から出た言葉は何の弁解にもなっていなかったが、少女は子ども特有の勘の強さで男の悪気のなさに気付いたのだろう、警戒を解いてにつこりと微笑んだ。

年齢よりも大分ませた感じのする少女も、微笑めば年相応のあどけなさが生まれる。

「ここに花が咲いたのは、私が生まれて初めてなの」
そういつて辺りを見渡す。

「こんなにたくさん木があるのよ。桃は歳をとるのが早いから、毎年新しい木を植えているそうなの。なのにここ三十年…いいえそれ以上咲いていないんですって。ねえ、三十年ってすごく古いんでし

よう？」

不意の問いかけにどう対応すべきか考えあぐねて、男はあいまいに頷いた。その困惑をよそに、少女はお構いなしに続ける。

「それは“ぎよくざ”に王がいなかったからなんですって。前の王さまが亡くなつて、私が生まれた年に新しい方が王さまになったんだけど、それが悪い人だったから桃花は咲かないんだって大人たちは言っていたのよ。でも、今年咲いたってことは、今の王さまはやっぱり良い方だったってこと？」

返答がなかるうとも、気にせず少女は話す。

「でも大人たちは口をそろえて前の王さまの方が良かったって言うの。でも、新しい王さまになってから咲かなかった花が咲いたわ。それって言っていることが“むじゅん”してるんじゃないかって？ それに、王さまが亡くなるのはその方が悪い事をしたということなんでしょう？ だったら前の王さまの方が悪いに決まってるわ」

吹く風は暖かった。しかし、木々に花が無いだけでなぜかうすら寒く思える。

荒涼とした桃園に小さな少女と相對して、男はその真っ直ぐな瞳を見返すことができなかった。

「先王は…決して悪い方ではありませんでした」

男の後ろめたさを含んだ気持ち、言葉づかいをそっけないものにさせた。

「前の王さまを知っていたいらしたのね。気を悪くしたかしら？」

少女は少しバツが悪そうに肩をすくめる。

「私は考えなしにお喋りしすぎなのね。お母様には毎日お前は喋りすぎだつて言われるの。女の子はお喋りでないほうが良いんですって。でもそれってつまらないこと？」

そう言つて少女はふっくりとした小さな手で自らの口を塞いだ。

「…またお話しすぎちゃった」

少女が反省の意を込めて可愛らしく舌を出すと同時に、街の端にある寺院から正午を知らせる鐘が響いた。

「あらいけない」

少女は市街の方を振り返る。

「鐘が鳴ってしまつてからじゃ、昼餉に間に合わないわ。お父様はとても時間にうるさいの」

急いで街に向かう急坂を駆け下りようとして、一旦少女は男に振り向いた。

「貴方、また此処に来るの？」

男は、表情を変えずにゆつくりと頷いた。

「本当ね？」

少女の確認には答えず、男は曇天の空を見上げる。

鳶が一羽、輪を描いて悠然と飛んでいた。遠く響く啼き声がうら悲しく灰の景色の中に響く。

「そうすることが、国に対する私の償いでもあるのです」

中空に視線を彷徨わせ、独語のように呟いた。

その時、男の浮かべた表情が何を思つてのものなのか、その内心を知るには少女はまだ幼すぎた。

「何か悲しいことがあつたのね？」

細い首をかしげながら男に近づき、その手をとった。

思いがけず小さな暖かい手に包まれて、男の面は一瞬微かに和らいだ。それは極々注意深く観察しないと分からないほどあるかなきかの変化だったが。

「私は香桃というの。私でよければ、いくらでもお話相手になるわ」
今日は帰らなければならないのだけど、と口ごもりながら付け足して、少女はぱつと身を翻し市街に向かう坂を下りながら屈託なく手を振った。

「またお会いできる日を楽しみにしているわ」

男は再び感情の見えない顔に戻り、ゆつくりと会釈した。

「私が再び此処に来る時は、他の木々も花を咲かせているでしょう」
その予言のような言葉に、少女はふふと笑う。

「そうなるといいわね」

満面の笑みを残して、香桃は小さな背に髪を乱して坂を掛け下りていった。

あたり一面に淡い桃色の霞が掛かったかのような景色だった。

桃園の百樹は、まだその枝先に五分ほどしか蕾をつけず空虚な感否めない。しかし各々の木に満遍なく花開いていた。

男は桃の木を振り仰いだ。五年前にこの桃園で唯一花をつけた木である。花びら越しに見る空は、白く靄のかかったように見えた。

「貴方の言う通りになったわね」

かん高さの少し薄れた、少女の声が聞こえた。

その姿を認めると、男はゆっくりと会釈をした。

現れたのは十二、三ほどになった香桃であった。見違えるほどの成長を見てはいるが、艶のある濃緑の髪と生気に満ちた瞳から辛うじて香桃であることが分かった。背の中ほどまで伸ばされた緑の髪は、きれいに編まれて後ろで一括りに結ばれている。美しくきらめく鳶色の瞳は、益々勝ち気さを増したようだった。

「客人、お待ちしておりましたわ」

唐突に拱手の礼を取る。

面喰ったのだろうか、表情に乏しい面の中に微かに眉を上げて立ち尽くす男に、少女はいたずらそうに微笑んだ。

「『客人、遠方より来りて共に杯を交わす。一人花見に興ずるはおかし。いわんや共に興ずるは尚おかし』」

なお言葉なく直立不動に佇む男だったが、香桃は気にするでもなく言葉を継いだ。

「“对待”という古詩よ。これを習ったときに貴方のことが浮かんだ。遠くから来た方を花見でもてなすなんて、ぴったりでしょう。それ以来、いつ貴方が来てもいいように此処へ来る時はいつも茶器を持ってきているのよ」

少女の指の先に視線を向けると、そこには籐の籠が置かれ、中に白

磁の小ぶりの茶器が並んでいるのが見えた。

「“対待”の詩は小学で習ったの。私、頭が良いのよ。老師にいつも褒められるの。なのにお父様ったらお前は学をつけなくていいですって。きつと“じぎようかくちよう”のためにさつさと私をお嫁にやるつもりなんだわ」

間断なく喋りながらも少女は手際よく、茶杯に湯を注ぐ。

「いつでもそうなの。私の意思はお構いなしよ」

背伸びした愚痴をこぼすが、おおそ大人の受け売りなのだろう。その言葉に差し迫った深刻さはなく、表情は屈託なく明るい。

「お茶はいかが？ 故事にならつてお酒の方が気分が増すのでしょうけど、生憎私は飲めませんの」

男は躊躇しながら、差し出された茶杯を受け取った。

「…私も酒は苦手です」

呟くような声で、返す。

「あら、それじゃあちようどよかったわ。どうぞお飲みになって」
断る理由もなく勧められるままに小さな杯をあおると、ふっと甘い香りが口内に立ちこめた。その香りは、口に含んだ瞬間は酔うほどに濃い、一瞬の後に驚くほど軽やかな後味となって余韻を残す。

この定まらぬ国情で、これほど良質なものを生産できる力がこの国にあるものか。

男は、いまだ復興の兆しの薄い辺境の人々の、そのしたたかな底力に少なからず驚いた。

少女は男の微かな反応に称賛の色を見てとって、目を細める。

「このお茶、桃の香りがするでしょう。“桃茶”は興丘の特産品なの。お父様が雁に流すので大量に仕入れているから、家には腐るほどあるのよ。温かくない飲み物をお出した後の言い訳ではないのだけれど、冷めてもおいしいの」

香桃が供した桃茶は、飲み下してもさらりとした甘みがまだ口に感じられる。

「昔は白端の茶とこの桃園から収穫した花を原料にしていたのだけ

ど。慶が傾いてからは雁から原料を買い付けて、加工品を雁へ売る方法しかとれなかったの。でもようやくこの桃園の木々が花を咲かせるようになって。これは今年三十年ぶりにできた慶国純正品なの」「生粋の、慶国産なのですね…」

少女は力強く頷いた。

「慶が自分の力で歩き出したと、皆言っているわ」

瞳は希望に満ちてきらめく。

「私が幼かったころとは違うの。大人たちは口を開けば呪詛ばかり。私が初めて口にしたのを覚えている言葉は何だと思う？」「しょもない」：“仕様もない”よ」

そういつて自嘲するようにくすりと笑う。

「今は違うわ。皆、前を向いているの」

少女は眼下に広がる市街を指差した。

数年前に灰色に煙っていた荒地は、温かな乳白色に包まれた街に変貌していた。雲間から差す薄い光の帯が、土起こしを終えた田畑を柔らかく照らす。

暖かい風が吹き抜けた。

ざわと揺れる枝先から花片が一斉に飛び立ち、薄紅の紗幕が視界を遮る。

遠く山里が桃花の香りの中に茫漠と姿を顰め、現を忘れるほどの様だった。

二人はしばし言葉を忘れ、花散る様に見入った。

風が止み、静けさが辺りを支配した。鶯の鳴く音が聞こえる。

男は目を細め、ほんの少し口角を上げた。

僅かな表情の変化だったが、常が無表情な分、顕著な変化として見るものを驚かせる。

「まあ。そんなお顔もできるのね」

香桃はきょとんと目を瞬かせた。

「とても良いお顔だわ。悲しい事は去ったのかしら？ 前にお会いした時はそれはそれは悲しい顔をしていたもの」

少女に指摘されて、男は堅い殻で覆われた自分の外皮がすべて剥がされるような感覚を受けた。年端もいかぬ少女に内心を悟られるほど、あの頃の己には余裕がなかったか。

自らを思い起こすと。

確かにあの時は。致しようのない過去の過ちと、手に余る未来の重圧とに耐えかねるようにこの地を訪れた。

「過去の過ちは消せませんが、少し前を向けるようになりましたから」

今度は内心を悟られまいと淡々と言う。が、押し隠そうとするものの大きさに、力み過ぎて声は揺れた。

「貴方が桃の園しかないこの丘陵に来ることも、その過去と関係があるのね？」

やはり香桃の、すべてを見通す澄んだ瞳は誤魔化せないと男は嘆息した。

「…これが過去の人と交わした最後の契約なのです」
言葉切りに語る。

「慶の行く末を折々に必ず報告にまいります、と」

だが、以前に訪れた時は。

ただ頭を下げ、許しを乞いに来るばかりだった。

約束事の進捗も、行く先の希望も語ることができなかった。

しかし数年で慶は変わった。

「今回は良い報告ができるわね」

男は表情を柔らかくして頷いた。

「過去は変えられないけれど…未来を変えるのは簡単なもの」

真顔でしかつめらしいことを言う少女に、男は不審げに眉を上げた。

「って、お父様がよく言ってるわ」

天真爛漫な少女は、即座に表情を崩して舌を出した。

慶王赤子の在位、十余年。

慶国は変わり始めた。

男は整えられつつある市街を見下ろす。

国に遅ればせながら、自分も変わることができるようか。
いや、変わらなければならない。

それが、あの人とのもう一つの約束なのだから。

四

三度目に出会ったのは、興丘の街はずれだった。

騎獣三騅の手綱を引く香桃の年齢は十八ほどか。丸々としていた顔の頬は削げ、手足が伸び、すっかり成人女性の趣だった。目鼻立ち
は華やかで、着飾れば大層見栄えするであろう姿形だ。

しかし、その身なりはおそろしく簡素で、ひつつめ髪に粗末な袍子、
その上に背子を纏うわがけっていた。いわゆる庶民の旅装である。

「あら、客人。久しいわね」

不審の目を感じたか、問われずとも故を語る。

「この格好？ これから、この街を出るのよ」

まるでそれが当然と言わんばかりの口調だ。

「お父様と喧嘩したの。手切れ金、分捕ぶんとつてきてやったわ」

香桃はそう言つて、じゃらと懷を鳴らし、からからと笑った。

「堯天に行くの」

確かにここは、堯天へ向かう街道に出る南門にほど近い。

「私は成人したら一人で身を立てたいといったの。でもお父様は“
お前には無理だ”の一点張り」

鳶色の瞳が煌々と光った。憤りからか、意気込みからか、その頬が
赤く染まる。

「でも、親の庇護下にあつて衣食住を保障される生活つて、家生しやうじんと
何の違いがあるの？」

頑として自を曲げない、若さゆえの意固地さ。それは美德である一
方で…。

「私は、私の意思で生きたいの」

男が沈黙しているのは、単に言葉が見つからないためだけではなかつた。
香桃のその姿が、あまりにもある人と重なって見えたから。

「放逐されて、野垂れ死ぬのをただ待つような人間にはなりたくない」

先行きへの不安を押し隠すかのように他者を排斥するほどの強気。自己を守るために堅く身を覆って張り巡らす頑なさ。

「姉様も、家生の娘たちも。なぜ、自ら考えようとしなかったのかしら？」

香桃の言葉を聞いて、男は人知れず溜息を漏らした。

民はなぜ自ら考えようとしなかった？

赤い髪に翠の瞳を持つ女は相對した自分に、そう問うた。

その心は、慶の国民に対する信頼が揺らいでいるようでもあった。

治世十八年。

多少なりとも玉座に慣れて己の政を俯瞰して見られるようになったことが、自省の念が強い彼女には災いしていた。

そしておそらく。

その問いに対し、自分の返した返答は彼女が望んだものではなかった。

「誰もが貴方のように行動できるわけではない」

愚直にも男は香桃に対し同じ返答を繰り返した。

「できるわよ。しようとしなくていいだけ」

香桃の反応も、まさにあの女ひとそのものだった。

「貴方の言うことは偏執の気が強い。そういう視点で物事を見る限り、その言を容れる者はいない」

どうして自分にはこういう言い方しかできないのだろうか。

発言して、すぐに後悔する。

遠い過去には。その言い様に心を閉ざされた。

そして今主には。その言い様が無駄な争いの種になる。

「だったら行動で見せて、受け入れさせるしかないわね」

そう言つて上目遣いに睨みつける香桃は、明らかに憤慨している様子だった。

三騷の手綱をぎゅっと引いて向きを転換すると、男に背を向けてそのまま南門へ歩み去る。

「謝った方がいいよ。あんちゃん」

通りのすぐ脇の店から、声が掛かった。

一部始終を見ていたのだろうか、商人が両手首をこすり合わせてにやにやと笑っていた。

「恋人だろう？ 喧嘩別れで行かせちゃまっていいのかい？」

誤解に慚然とした表情を浮かべながらも、男は確かに焦れていた。香桃が今主と重なるのだ。

ここで止めなければ過去の二の舞になる。

後が無いくらいに追いつめられた心持ちで、身体が勝手に動いていた。

「なに？」

不意に後方から肩に手を置かれて、香桃は不快を隠そうともせずに眉を寄せて振り向く。

沈黙の間があつた。

しびれをきらした香桃が再び歩を進めようとした瞬間、男は絞り出すように言葉を発した。

「貴方の思う通りにすればいい」

男の譲歩に、先ほどから反感の態度を見せていた香桃は少しバツが悪そうに肩を竦めた。

心を落ち着けるように一呼吸する。

「意固地なのはわかつてるの。お父様に対するつまらない意地だとか、他者に対する思いやりのなさだとか。それは私のいけない所」

そう言つて香桃は形のいい唇を噛む。

「そういうことは自分で全部分かってる。だからこそ、ただ認めてくれる人がほしいのよ」

声音は平静を保っていた。だがその瞳は、香桃がその存在を心底渴望していることを如実に表していた。

「ただ側にいて、受けとめてくれる人がね」

男は沈黙した。

寄る辺のない自我は、ただ彷徨うだけだ。

「御心のままに」

そう主に言っただけなのよ、己がそれに足る力を持っていないのが原因。

主の心のままに振る舞わせてなお、物事を正すことができるほどの力量があれば。

香桃は逡巡する男をじっと見つめていた。

「ありのままの行動を許すことに、責任を感じるのね？」

それは男の内心を読んだかのような鋭い指摘だった。

「…許した結果、取り返しのつかない事態になることを怖れているのは事実です。その事態を収拾できる確証が私にはありません故」

「どうして一人で始末をしようとするの？」

香桃はさも不思議という顔をした。

「一方が負ぶさるんじゃないの。互いに手を取って、歩くのよ」

「共に…歩く…」

「取り返しのつかない事態に直面したとして。一人で対処するのはなくて二人で考えることはできないの？」

香桃は問いかけて、続けた。

「一人で対処するのがよかれと思っているとしたら大間違い。相手は信頼されてないと思うわよ」

男ははつと、少女の顔を見た。

“ お前には信用がない ”

主が事ある毎に口にする言葉だ。時に冗談めかして、時に不貞腐れたように、時に気落ちしたように。

最近は… 妙に思いつめた様子で。

「 ありのままを認めてほしただけなのよ 」

香桃の畳みかけるような言葉に目が覚める思いだった。

主が自分に求めていたものが、おぼろげながらわかった気がした。

男の口元に、笑みが薄く浮かんだ。自嘲とも安堵ともとれるその表情は、他者を魅了するものだった。

「 あら、ふつきれたかしら？ 」

香桃が闊達と笑いかける。

「 その笑みが見られてよかったわ 」

いつの間にか門前まで歩を進めていた二人だった。

「 行くわね 」

南門から踏み出した香桃は、三錐の背に跨る。一瞬の躊躇もせずに乗騎の腹を蹴ると、その姿は瞬く間に彼方へ薄くなり、視界から消えた。

ひら、と残された男の眼前に薄紅色の花びらが舞い落ちた。

花びらを運んできた風に乗って、桃の香が鼻をついた。

“ 慶が自分の力で歩き出したと、皆言っているわ ”

少女の声が聞こえる。

帰ったら言おう。

慶の民は、自分で立とうとしていることを主に伝えて。

そして。

一歩ずつ共に歩きましょう。

四（後書き）

終わりっぽいですが、まだまだ続きます。
それにしても男の素性バレバレですね（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5253s/>

桃花の源 泉下の守

2011年8月31日03時54分発行